

「出雲流庭園に花は不要か?」（出雲流庭園の庭木の特徴）

「庭園文化研究分科会」 武田 隆 司

1. はじめに

平成30年5月、6月に出雲文化伝承館から当分科会に依頼されて開催した「出雲流庭園文化講座」では、座学とともに庭を回遊するガイドランスも行った。参加者から様々な質問があったが、ある方（やはり出雲流庭園を持つ方）から、「庭師さんから出雲流庭園ではサツキに花を咲かせてはいけない、花期の前に剪定するべきといわれたが、本当にそうか?」と尋ねられた。ちょっと返答に困った。庭と言えば四季折々の表情を楽しむものであり、庭木もそのための要素であると思い込んでいた。出雲流庭園の特徴については「出雲流庭園（歴史と造形）昭和50年」に著されているが、庭木についての記述は非常に少ない。「クロマツが多い、盆栽のような細やかな整形のものが多い」、「瀬戸内と同じようなマキ、モクセイ、ソテツ、ヤマモモ等の暖地性のものが多い」と書かれる程度である。出雲文化伝承館の文化講座には2回で50名以上の参加者があり、またNHKのテレビ放送にも取り上げられるなど、「出雲流庭園」への興味の高まりも見られる。今後、講座やガイドなどで庭を紹介するに当たり、庭の特徴についてももう少し細やかな考察を行う必要が感じられた。そこで庭を構成する4要素の水（出雲流にはない）、石（特に飛び石）、庭木、景物（灯ろうやつくばい等）のうち、今回は出雲流庭園の庭木に注目する。

出雲流庭園講座の様子（平成30年5月）



出雲流庭園ガイドランスの様子（平成30年6月）



2. 茶庭の庭木のあり方

出雲流庭園が茶庭であるという違和感を持つ人もいるようである。茶庭といえ、表門から飛び石を通過して、中門、待合を経て小さな庵の茶室のにじり口を歩いていくその間の比較的閉鎖的な「露地」という茶庭を想像する人が多いであろう。これは「草庵式茶庭」と呼ばれるものである。一方「書院式茶庭」とよばれる庭は、主に書院と呼ばれる比較的広い部屋で茶会が催される際に建物から観賞する庭である。出雲流庭園は主に座敷から観賞する「書院観賞式」の庭であるが、灯ろうやつくばいを強調する手法、また中門からの飛び石の動線などを見ると「草庵式茶庭」の「内露地

」を彷彿とさせる点などから、「書院式茶庭」に分類してもよいと思う。

では茶庭の庭木はどのような目的で植えられ、どうあるべきなのか。関連する書籍をいくつか調べて見た。もともとは茶庭には植栽はなかったが、千利休の後期頃（安土桃山後期）から少しずつ植えるようになったとされる。茶庭にはあまり花木（花を觀賞するする樹木）を植えない。それは茶庭が深い山道に見立てられていることと、茶室に向かう人々の心を乱さないためである。招かれた客は、茶室における主人との出会いを楽しみにする。一期一会といわれるように、その出会いは貴重な一時であることから、精神を乱すような色彩や強い香りは、できるだけ控えることになる。落葉樹も同様に、四季の移ろいや、人生の悲哀などを強く意識させてしまうため敬遠されてきたようである。また茶事の時、茶室の床の間には花を生ける。もし露地に多くの花木があれば、茶室に入ったとき、床の間の花を見た感動が薄れてしまう。香りのある樹木も香によるもてなしにとっては邪魔な要素となる。よって茶庭の樹木は花や香りの少ない常緑樹が主体で自然風の仕立て（年中変わらない山中の趣を表す）となる。これらはすべて草庵式茶庭のことであり、このような庭は単に觀賞を目的とするだけではなく茶の湯（茶道）の場として考えられているからであろう。

具体的に草庵式の茶庭ではどのような庭木が多く用いられてきたのか、一覧にまとめる。やはり常緑樹が多く使われてきたようである。また、下線の花木やイチヨウやカエデなどの紅葉する樹木も見られる。

種別	樹種
常緑針葉樹	アカマツ、クロマツ、スギ、ヒノキ、カヤ等
常緑広葉樹	ネズミモチ、クスノキ、モッコク、シラカシ、サカキ、ツバキ、サザンカ、イヌツゲ、ツツジ、ヒサカキ等
落葉樹	カシワ、グミ、ホオノキ、イチヨウ、 <u>ウツギ</u> 、カエデ、マユミ、ナンテン、 <u>ハギ</u> 等
その他	ヤブコウジ、シュロ、マンリョウ、タケ、ススキ、トクサ、フキ等

「茶道入門ハンドブック」（三省堂）より

歴史的な変遷を見ると、千利休（1522～1591）の後期頃から少しずつ植えるようになり、果樹は不可、マツ、カシ等は可、落葉樹は嫌ったとされる。古田織部（1543～1615、作庭家）は、内露地には花の咲く樹木は不可、シュロ、ソテツは内外露地とも可、大きな花が咲くものは外露地も不可とした。その弟子の小堀遠州（1579～1647）は比較的樹種にこだわらず、マツ、モミジ、スギ等も可としたが、茶席の花と庭の花の重複は不可とし、これは今も茶道界の慣習になっているようだ。

3. 出雲流庭園の庭木の樹種の傾向

出雲流庭園にはどのような樹種の庭木が植えられているのであろうか。また一般的

な茶庭（草庵式茶庭）と比べて違いがあるのか。次表は、出雲流庭園内に見られる樹木と江戸初期以後の主な茶庭（草庵式）の樹木上位20種をまとめたものである。出雲流庭園については、これまでの視察の結果と「出雲流庭園 歴史と造形」（S50年）を基に21庭園について集計し、草庵式の茶庭については、「日本庭園史大系」（S47年）掲載庭園を中心にこれまでの視察庭園も含めて10庭園について集計した。草本類を除き計92種類の樹木が確認できた。

出雲流庭園の庭木上位20種(21庭園)

江戸以後の主な茶庭の庭木上位20種(10庭園)

	樹名	採用庭数	種別	高低	花・紅葉
1	クロマツ(マツ)	21	常針	高	
2	サツキ	19	常広	低	花
3	ヒイラギモクセイ	17	常広	高	
4	モミジ類	17	落広	高	紅葉
5	マキ類	15	常針	高	
6	ドウダンツツジ	13	落広	低	花・紅葉
7	ヒバ類	12	常針	高	
8	モッコク	12	常広	高	
9	ツツジ類	11	常広	低	花
10	ツバキ類	11	常広	高	花
11	ウメ	9	落広	高	花
12	モチノキ	8	常広	高	
13	ソテツ	7	常広	低	
14	ヤツデ	7	常広	低	
15	アオキ	6	常広	低	
16	シラカシ	6	常広	高	
17	スタジイ	6	常広	高	
18	ナギ	6	常針	高	
19	ナンテン	6	落広	低	実
20	ヤマモモ	6	常広	高	

	樹名	採用庭数	種別	高低	花・紅葉
1	ツバキ類	8	常広	高	花
2	クロマツ(マツ)	7	常針	高	
3	ネズミモチ	6	常広	高	
4	ヒサカキ	6	常広	低	
5	ヒノキ	6	常針	高	
6	モッコク	6	常広	高	
7	アオキ	5	常広	低	
8	アセビ	5	常広	低	花
9	アラカシ	5	常広	高	
10	サザンカ	5	常広	高	花
11	サツキ	5	常広	低	花
12	モチノキ	5	常広	高	
13	モミジ類	5	落広	高	紅葉
14	キンモクセイ	4	常広	高	花・香り
15	クチナシ類	4	常広	低	花・香り
16	サカキ	4	常広	低	花
17	シュロ	4	常広	低	
18	シラカシ	4	常広	高	
19	スギ	4	常針	高	
20	ドウダンツツジ	4	落広	低	花・紅葉

※網掛けは落葉樹

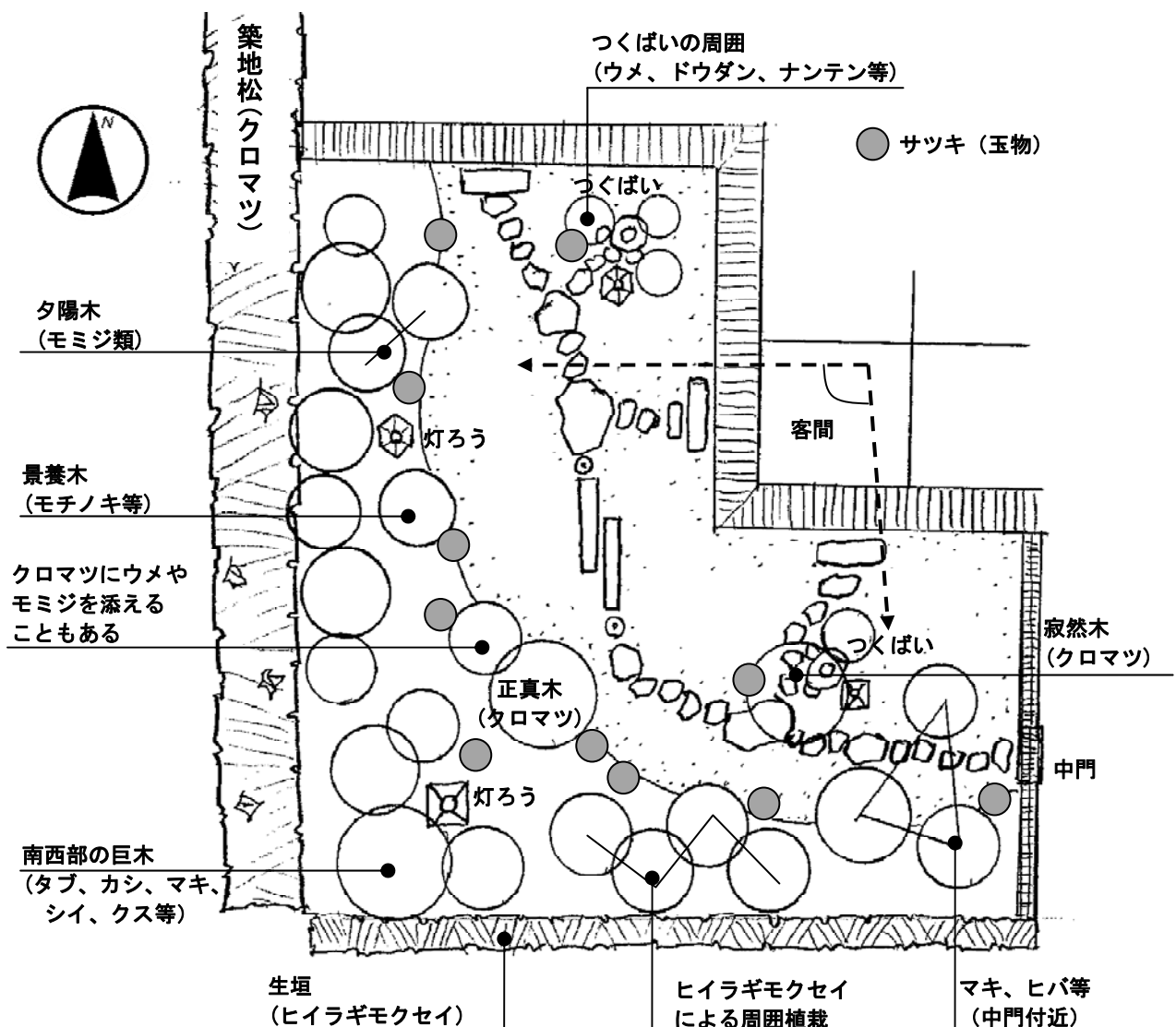
右表の草庵式の茶庭の樹木は、常緑樹が上位を占めマツ、ヒノキ以外は概ね常緑広葉樹が多く、「市中の山居」にふさわしい野趣のある雑木類ながらも季節を強調しない意図が見られ、前頁の茶庭樹種一覧とも整合する。意外にも花木のツバキが多用されている。ツバキは冬から春の茶席の花（茶花）としても使われるため、本来は庭木としては不適と思われるが、実際に茶花として使われるものは品種改良した珍しいものが多く、庭木として使われるのはヤブツバキのような自然風のものであるため、重複には当たらないようである。

一方、左表の出雲流庭園ではクロマツ、サツキがほとんどの庭に使われている。クロマツは築地松の他、庭の主要な木として使われており、サツキは庭の各所に円形に刈り込まれた「玉物」として使われる。ツツジ類も同様である。その他の花木としてツバキ、ドウダンツツジ、ウメなども多く使われるが、ツバキ、ウメは茶花でもある。またモミジやドウダンツツジといった紅葉する樹木も多くの庭に見られる。そして注目すべきは、マキ類とヒイラギモクセイがほとんどの庭に見られることである。こ

れらは一般的な茶庭ではほとんど見ることができない。出雲流庭園ならではの。茶道関連著書によると、マキやヒバ等の葉の小さな針葉樹は落ち葉の掃除がしにくいことから敬遠され、ヒイラギモクセイのようなトゲのある樹木も敬遠されるようである。さらにヒイラギモクセイは香気を持つ。マキは、古木の枝の様子が龍に似て縁起がよい樹木とされ、関西地方ではマツの代用として主木として使われることもあるようだが、出雲地方では高さ5m以上の高木をろうそく形に仕立て、庭の背景を構成している。ヒイラギモクセイは、棘があることから、鬼門除けとして使うこともあるとされ、出雲流庭園の生垣や庭の周囲に使用されるのはこのような意味があるのかも知れない。なお庭の方位と樹木の関係については林技術士が研究されている。

4. 出雲流庭園の庭木の配置

出雲流庭園の庭木はどのような配置がなされているのか。下図は出雲流庭園、特にその原形といわれる出雲平野の豪農屋敷の庭木の基本的な配置を示したものである。視察の結果と著書「出雲流庭園、歴史と造形」を参考にしている。



図のように庭は建物の南西方向にL字形に配置され、主に客間から観賞する書院観賞式の庭である。西側は築地松、南側は高さ1.2m程度のやや低い生垣で囲まれる。築地松はクロマツ(初期はタブ等の常緑広葉樹)、生垣は主にヒイラギモクセイが使われ、イヌマキ等が使われることもある。庭の主要樹木は下表のように4つの役木と呼ばれるものが江戸時代の庭の手引き書「築山庭造伝」に示されている。出雲流庭園は、この全国共通の手引き書にこだわらず、独自の様式を作り上げてきたとされるが、生け花などにも共通する「真、添え、控え」といった空間造形の基本となる役木の配置は押さえているようである。まず庭の主役となる正真木は庭の南西の中央部に仕立物のクロマツを置き、その「添え」で対比美を示す景養木はモチノキ等の常緑広葉樹を客間の西側正面部に置く。景観的なバランスをとる「控え」となる寂然木は主に客間の南側にクロマツを置くことが多く、ヒバやマキなどの針葉樹の場合もある。寂然木に相對した西側にはモミジなどの夕陽木が置かれている。

しょうしんぼく 正真木	主要景観として庭の中心的存在を意味する心木。他の木はこの木に従って配置する。
けいようぼく 景養木	正真木とは対比美(添え)を示すもので、正真木が針葉樹なら広葉樹とする。
じやくねんぼく 寂然木	正真木と景養木の安定を増す(控え)もので、庭の東側に植える。主に常緑樹
ゆうひぼく 夕陽木	寂然木と相對して庭の西寄りに配置する。正真木との釣り合いで落葉樹を用いる。

「造園ハンドブック」(日本造園協会)より

出雲流庭園の特徴的な樹木のヒイラギモクセイとイヌマキの使い方であるが、どちらも庭の南西から南に植えることが多い。ヒイラギモクセイは庭の南側の生垣の手前に複数本植え、庭の南側の背景を構成する。イヌマキは中門を入った付近の飛び石沿いに単独で植えることが多い。イヌマキの代わりにヒバ類を使うこともあり、一般の築地松民家でもこの付近には必ずといっていいほど針葉樹を使うようである。また出雲流庭園の南西部には、灯ろうや五重塔、巨石など配置することが定石であるが、その傍には庭の外からも見えるような見事な大木を単独で置く。タブ、カシ類、スダジイ、モチ、モッコク等の常緑広葉樹の仕立物が多く、イヌマキを使うこともある。ウメやナンテン、ドウダンツツジはつくばい(手洗い)の周囲に使われることが多く、害虫よけの機能もあり、手引き書に習うものであろう。サツキについては、大刈り込みのような花を強調して見せる使い方はせず、単体の玉物として築山の裾や石組や高木の足下に使われている。

5. 出雲流庭園の庭木の仕立て方

庭木の仕立て方(剪定方法)は、前述の「出雲流庭園(歴史と造形)」で「盆栽のような細やかな整形のことが多い」とされるように、自然樹形ではなく象徴的な仕立てを行う傾向がある。出雲文化伝承館には、豪農屋敷庭園(出雲流庭園)と独楽庵庭

園（草庵式茶庭）の2つの対照的な庭があり、仕立て方の違いがよく分かる。下の写真は2つの庭園の樹木の仕立てを比較したものである。（左：出雲流、右：独楽庵）

出雲流庭園の主役のクロマツ（正真木）



独楽庵内露地のアカマツ林



出雲流庭園の常緑樹の段づくり仕立て



独楽庵の常緑広葉樹の自然風仕立て



左上の写真のクロマツは単体で象徴性の高い仕立てがされ、右上のアカマツは自然なアカマツの林の風情を演出している。広葉樹についても左下の盆栽風の仕立てに対して、右下は自然な雑木林を感じさせる。

また出雲流庭園の特徴として、クロマツの雲竜仕立て（高砂づくりともいう）という独特の剪定方法がある。雲竜仕立ての語源は謎であるが、一般的には「雲竜」は「竜が雲に乗って飛翔するさま」とされ縁起がよく、陶器や着物の文様にも使われている。植物にも雲竜柳や雲竜梅があるが、枝が曲がりくねって下垂していることが名の由来になっているという。出雲流の雲竜仕立ては、主幹は直立とし、主要な枝をくねくねと複雑に曲がるように仕立て、その先端を枝垂れさせていく。全体の姿はやや円錐に近いものもあれば、卵形に近いものもある。一般的な松の仕立て（段づくり）とはかなり趣を異にする。次の写真は出雲流庭園の雲竜仕立てのクロマツと一般的な庭園のクロマツを比較したものである。また、その他の針葉樹もこのような剪定を行うことがあるが、なぜこのような仕上げを行うかは謎である。

出雲流庭園のクロマツの雲竜仕立て



一般的なクロマツの段づくり仕立て（倉敷市内）



下垂させた枝
（出雲流）→



くねくねと曲がる枝（出雲流）



また、「反り」の造形も特徴と言える。下の写真のように庭の北西部を囲む築地松や南側の生垣は端部に向かって緩やかに反るように、また根元から頂部に向かっても反るように剪定されている。このような剪定は豪農屋敷だけではなく、現在の出雲平野の民家のほとんどの庭で見られる。これは建築にもいえることで、和風建築の母屋の棟は緩やかに反りが入り、今は珍しくなった長屋門や茅葺きの屋根の棟も同様のデザインである。以前地元の建築家に聞いた話では、朝鮮半島の文化の影響によるものではないかということであった。また、このような反りのデザインは出雲大社などの鳥居を思い起こさせる。鳥居は世俗の領域から神聖な場所を区別する役割を担っているとされるが、庭を囲む生け垣にはふさわしいデザインなのかも知れない。

築地松の剪定（出雲市斐川町）



庭の南側の生垣の剪定（出雲市斐川町）



6. まとめ（出雲流庭園の楽しみ方）

出雲流庭園は草庵式の茶庭と異なり、花木や紅葉する樹木もあり、季節を感じる要素を持っている。庭木の仕立て方も自然樹形にとらわれず象徴的で整えられた樹形としている。出雲流庭園のような書院式茶庭は、比較的気軽に茶を楽しむ庭で、観賞も大きな要素である。茶道を前提とした精神性を重んじる移動空間の草庵式茶庭との機能の違いがあるものと思われる。また、じめじめした山陰の風土の中、「深山の山道」のようなしっとりとした空間を演出するのではなく、書院からの明るくすっきりとした眺めをよしとしたのではないか。さらにマキやヒイラギモクセイ等の使用、「雲竜仕立て」、「反り」等の剪定術、樹木の配置など、庭の手引き書にはないこの地方独特の造形感覚と技術を持っている。

冒頭のサツキの花の剪定についての庭師の見解は、草庵式茶庭の作法の名残によるものなのかも知れない。ただ出雲流の庭のサツキは、頼久寺庭園（岡山県、小堀遠州作、右下写真）の刈り込みのように花を主役とするのではなく、庭の所々でさりげなく季節を感じさせるアクセントであり、この地方の人々の美的センスと奥ゆかしさを感じる。是非花を楽しみたいものである。

7. おわりに

前述のNHKの番組は島根の地域資源を取り上げるものであったが、米国の庭園専門誌のランキングで島根県の庭が京都に次いで多くランキングされているのはなぜかということからはじまったものらしい。「松平不昧没後150年」、「茶の文化」、「出雲流庭園」などのキーワードの検索から当会に取材依頼が来たと思われる（昨年度も文化庁より当会の研究レポートを見て調査協力の依頼があった）。2017年の庭園ランキングでは、足立美術館や由志園をはじめとして県内の7庭園がランクインしている。この中には康國寺、木佐本陣記念館、皆美術館（松江市内の旅館）の3箇所の出雲流庭園が入っている。PR次第で観光資源としても十分に生かせるこの地方ならではの文化遺産である。個人観賞とは違い、庭の特徴や歴史などを解説する今回の出雲伝承館での講座やガイダンスは、観光客のみならず地元の人たちにも地域資源としての庭の魅力、価値への理解をより高め、保全と活用につながるとと思われる。

出雲流庭園のサツキ（出雲文化伝承館）



頼久寺庭園のサツキ刈り込み（岡山県高梁市）

